

仙台の坂道をゆく

仙台地方裁判所長 小林昭彦

仙台七坂を知っていますか。

こう尋ねると、仙台でも「知りません」という返答が意外に多い。仙台市の公式ウェブサイトでも紹介されているのだが……。

仙台七坂とは、大坂、扇坂、新坂、石名坂、元貞坂、茂市ヶ坂、藤ヶ坂のことですが、いかがでしょうか。

こう言うと、「扇坂は知っています。東北大学川内キャンパスの中を西に上る坂でしょう」（これは誤解）とか、「鹿落坂や唸坂なら知っているけど」とか、反応はまちまちだ。仙台には古来「六坂」の称があり、これに藤ヶ坂が加わり、藩政時代の末頃までに「仙台七坂」の名数が定着したといわれている。

正直にいうと、私も昨年七月に東京から仙台に赴任するまでは知らなかった。着任の記者会見の準備で趣味の一つが坂道散策だと仙台地裁総務課係長の佐藤智彦さんに伝えたら、仙台にも仙台七坂などの坂があると教えてくれたのだ。

東京では江戸切絵図（江戸の古地図）と現在の地図を対照する本を片手に散策をしていた。江戸切絵図に載っている多くの坂が、そのまま現存することに大いに驚く。この坂を武士や町人も歩いていたのかと思うと胸がわくわくして江戸の坂を探して歩くようになった。五百を超えるという江戸の坂の中には坂名が面白いものも多く、その由来も気にかかる。古本屋等で探すと、いくつもの解説書が見つかった。すっかり江戸の坂に魅せられ、その楽しみを広く語っていると、月刊登記情報の編集部から依頼があり、この月刊誌に「坂道をゆく」の連載をしている。趣味が高じて、という感じだ。

仙台に赴任後、仙台の坂に関する文献や藩政時代の絵図などを探し、坂道散策を始めた。そこで、仙台七坂を始めとする仙台の坂について紹介をしよう。

まず、大坂（おおさか）は、青葉通の西端の大町交差点から広瀬川に架かる大橋まで下る大きな坂で、堂々たる風格が感じられる。ほぼ真っ直ぐの坂だが、藩政時代の絵図を見ると、下るとき途中で左に次いで右にほぼ直角に曲がる坂だった。仙台城の防御のためだったかと思われるが、さすがに明治時代になると通行に不便で改修工事をしたのだろう。一八八〇年の地図から現在の形状だ。

次いで、扇坂（おうぎざか）だが、大橋から先に進み、大手門脇櫓前で右折し、仙台国際センターの西側の道を北に進むと左手に扇坂跡との標識がある。

扇坂は、藩士が仙台城二の丸（現在は東北大学文系四学部のキャンパス）に登城する坂だった。藩政時代の絵図を見ると明らかだが、その坂下が扇状に広がる形状だから、扇坂と呼ばれた。明治初期に廃道となり、現存しない。その先の千貫沢を越えると東北大学川内キャンパスの中を西に上る坂があり、この坂が誤って扇坂と呼ばれることがあり、この坂のバス停の名称もかつては扇坂だった。正しくは行人坂で、坂下の辻標も、そう明示する。坂上に庵を結んだ行人の塚があったことにちなむ坂名だ。

さらに北に進み、広瀬川に架かる澱橋を渡り終わったところで右手の階段から橋下の道に降り、その道を東に進むと、へくり沢跡辺りから上り始め、右に次いで左に大きく曲がりながら急勾配で上り、左手に屹立する崖の上の宮城県知事公館の正門前に至る。それが新坂（にいざか）だ。一六九五年、田村内蔵允頭行が藩主伊達綱村の命により知事公館の場所に屋敷を建て、その屋敷前から澱橋まで坂道を開いた。新しい坂だから新坂と呼ばれた。

石名坂（いしなざか）は若林区石名坂（町名）にある。七郷堀に架かる蔵前橋のすぐ北の交差点から北に進む小道の坂で、とても緩やかな勾配だ。坂名は、この地から江戸に出て名妓として大活躍をした石名にちなむ。武士の娘で学問があり、美貌であったという。石名坂付近の圓福寺に石名の墓石がある。

仙台七坂の残りの坂の紹介は前述のウェブサイトや連載に譲り、最初に登場した鹿落坂（ししおちざか）と唸坂（うなりざか）の紹介をしたい。

鹿落坂は、霊屋橋の先から八木山に向かう険しい崖地の坂で、蛇行しながら急勾配で上る。その湾曲と勾配が美しい。坂上からの広瀬川や仙台の街並みの眺望も素晴らしい。坂名は八木山一带から鹿や猪がこの坂から広瀬川に下りて来たことにちなむ。「落ちる」とは、かつての方言で「下りる」の意だという。

大崎八幡宮の前から八幡町通を西に進むと右手に唸坂を表示する辻標があり、ここから右手に急勾配で上る坂が唸坂だ。仙台城二の丸の造営に際し、国見峠付近から切り出した石を牛が曳いたが、この坂を牛が唸りながら進んだため唸坂と呼ばれた。雨のときに滑りやすいため転訛して鰻坂とも呼ばれた。

仙台の坂の紹介は以上のとおりだが、少しでも坂道散策に興味を持っていたただけだろうか。地図や辻標などを参考に一人でも多くの方が仙台七坂を始めとする仙台の坂の散策を楽しんでいただければ望外の幸せである。